

肢体不自由特別支援学校における授業のデザイン・実施・評価 に関わる実践研究Ⅱ

—意思決定論モデルに基づくチーム・ティーチングの分析—

○平山彩乃¹⁾

内海友加利²⁾

安藤隆男³⁾

1) 茨城県立水戸特別支援学校 2) 筑波大学大学院人間総合科学研究科 3) 筑波大学人間系

KEY WORDS: 意思決定論モデル チーム・ティーチング 授業分析による授業改善

I. 問題の所在と目的

本研究は、肢体不自由特別支援学校の校内研修の一環である「授業改善に関わる外部専門家の学校訪問」として、肢体不自由教育学を専門とする大学教員を招聘し、共同して実施されたものである。今日、特別支援学校における指導形態の一つとして積極的に導入されるチーム・ティーチング（以下、TT）に焦点化し、授業における授業者の複雑な意思決定プロセスを解明し、授業における教師の成長、専門性の向上に基礎的、実践的な知見を提供することを目的とする。

II. 方法

1. 対象：A肢体不自由特別支援学校における自立活動の授業場面である。授業グループは小学部X学年重度重複教育の課程に在籍する男子2名、女子3名と、授業者であるMT（経験年数3年）と2人のST（経験年数22年、経験年数11年）、介護員で構成されている。本研究では、2回の授業研究のいずれにも参加することができたMTとST（経験年数22年）の2名が分析の対象とされた。

2. 手続き：授業研究は6月と9月の2回実施された。それぞれのねらいと手続きは本研究の発表Ⅰの通りである。授業終了後、授業者が1人ずつ抽出され、撮影されたビデオ映像を用いた授業の振り返りインタビューが行われた。後日、MTとSTは振り返りインタビューから得られた授業分析結果のフィードバックを受けた。以上の流れが2回の授業研究についてそれぞれ実施、分析された。

3. 分析の視点：授業実践中に授業者が感じた「ズレ」に着目し、振り返りインタビューと授業分析フィードバックが行われた。なお、本研究においては、授業デザインと実態との「ズレ」認知に授業者間で違いが生じているかどうかを分析の視点とした。「ズレ」を感じて行われた授業者の意思決定場面を同定し、TTの中で個々の授業者の意思決定がどのようにして行われていったかについて授業時に撮影されたビデオ映像と振り返りインタビュー時に記録された音声から分析する。

なお、本研究は保護者に研究内容について説明し、同意を得て実施された。

III. 結果及び考察

1. 第1回フィードバックからみた授業改善

MTとSTがそれぞれ感じた「ズレ」の事象がほぼ一致していたことから、「ズレ」についてMT、STが共通の認識をもっていたことが明らかになった。具体的には、児童Aが集団を離れるという事象や、児童Bの表情の変化が乏しいという事象について、同様に「ズレ」を感じていた。このように「ズレ」を感じた事象が共通していた要因としては、授業前に授業者間のルールとして「①児童の様子をじっくり観察する。②児童の反応に困ったり見取りに迷ったり、提案があるときにはアイコンタクトで教員間の意思を共有する。」が設定されていたことの影響が大きかったと考えられ

る。一方で、同じ事象に対して「ズレ」を感じながらも、授業実践の中ではMTとSTが共に「ズレ」を感じていたことについて認識されず、意思決定については共有されないまま、MT、STがそれぞれの意思決定を手がかりに（MT：STが児童Aを集団に戻すと予測して見守る、ST：児童Aの行動を手がかりに新しい活動を展開しようと様子を観察する）授業が展開されたことが課題として挙げられた。

以上のことから、第2回の授業研究に向けた日々の学習の中で、授業者内のルールを「①児童の様子をじっくり観察する。②児童の反応に困ったり見取りに迷ったり、提案があるときにはその場で声を出して相談する。」という、アイコンタクトからその場で声を出して相談するというルールに変更した。

2. 第2回フィードバックからみた授業改善

第2回の授業研究では、「ズレ」を感じた事象についてその場で声を出して確認し、相談したり提案したりする場面が増加した。具体的には、児童Cが集団を離れて廊下に向かうという「ズレ」の事象に対してSTは「どこに行くんでしょう。外向いているなあ。とりあえず行こう（集団に戻そう）と思ったけど止めて…（見守ろう）。」と児童Cの行動を疑問視しながら見守ることを提案する場面が見られた。STの発言を受けて、児童Cを集団に戻そうとしていたMTは児童Cを見守るという意思決定の変更を行った。別の場面では、2人の児童が同時に布ハンモックに近づいたという「ズレ」に対して3人の授業者全員がしばらく児童同士の関わりを観察したのち、「じゃあ、2人でやってみますか」とMTが提案したことに対して「じゃあ、足と頭を互い違いにすれば…（安全かな）」とSTが賛同する様子が見られた。MTの提案によりMTとSTの意思決定が共有され、児童2人を同時に布ハンモックに乗せて活動する、という新たに授業デザインの変更がなされた。

このように、感じた「ズレ」についてその場で声を出して確認する、というルールの変更がなされた結果、アイコンタクトではお互いに気が付かなかった授業者間の意思決定の「ズレ」を共有しやすくなったと考えられる。また、授業実践の中で「ズレ」の共有がなされたことで、即時的に複数の授業者の意思決定内容が共通理解され、児童の反応を受けた授業デザインの変更へ繋がったと考えられる。

IV. まとめ

本研究で示した意思決定論に基づき、授業者が「ズレ」を認識して、授業デザインを改善していくというプロセスは、授業の打ち合わせや評価を行う十分な時間が確保できない、MTとSTの意思疎通が難しい、といった今日の教育現場がかかえるTTの様々な課題において有効な手段であると考えられる。

「ズレ」を共有し、解消しようとする取り組みを繰り返すことが、重度重複教育の課程に在籍する児童生徒を主体とした授業づくり、生活づくりに繋がると期待される。

(HIRAYAMA Ayano, UTSUMI Yukari, ANDO Takao)